

平家（平曲）の音楽学的解明と若手演奏家の育成を通じた平家の活性化について

薦田 治子
(武蔵野音楽大学)

東京 2018 年 5 月 24 日

はじめに

本日はこのような栄えある賞を賜ることになり、なんと感謝申し上げてよいかわかりません。私が日本音楽を研究しようと思ったのも学生時代に小泉先生との出会いがあったからだと思います。小泉先生は、いつも輝かしく眩しい存在でした。そして、その先生を記念して設けられたこの賞を受賞することなど思いもよらぬことで、いまだに夢のようですが、これを励みに、現在の取り組み、もう少し頑張ってみようと思います。

さて、今回の受賞理由は、「平家（平曲）の音楽学的解明と若手演奏家の育成を通じた平家の活性化について」ということですが、「音楽学的解明」は、諸先輩の先生方始めの多くの研究者の皆様から頂戴したご指導の賜物ですし、「若手演奏家の育成」といっても、実際は、平家をやってみようと言って下さった 3 人の若い演奏家たちの功績です。私自身はただ、こうした諸々の事柄や人を結びつける触媒のようなことをしただけだと思っています。

本日はここで機会を頂きましたので、現在の取り組み、これを私自身は「平家伝承プロジェクト」と呼んでおりますが、それについて、少しお話しさせていただければと思います。「平家」とは何なのか、ご存じない方もいらっしゃるかもしれないので、以下のような手順で、お話を進めさせていただきたいと思います。

1. 平家の歴史と現状
2. 平家伝承プロジェクト
3. 今後の課題と目標

1. 平家の歴史と現状

「平家」とは、『平家物語』を琵琶の伴奏で語る音楽種目の名称です。『平家物語』は、しばしば「日本を代表する文学作品」とであると説明されますが、成立当初から、琵琶法師

が語り歩いたことが知られますから、本来は『音楽作品』であったといったほうが適切だといえます。しかし、この作品の成立については、作者も含めて、確定的なことはよくわかっていませんから、語りを前提に書かれたかどうかともわかりません。しかし私たちが最もよく知っている『平家物語』の本文は、数ある『平家物語』のバージョンの内、「覚一本」と呼ばれている一本です。覚一というのは、14世紀に活躍した琵琶法師の名前ですから、少なくとも、この一本は、語りの台本であった、つまり平家という音楽作品の歌詞が書き留められたか、あるいは語りを前提に書かれたもの、といってもよいと思います。

先ほども申し上げたように、『平家物語』を琵琶の伴奏で語る音楽種目のことを歴史的には「平家」と呼びます。また、現在の伝承者も「平家」と呼びます。しかし、明治時代になって国文学や歴史の研究の世界で、「平家」は平家一族や『平家物語』の略称としても頻繁に用いられたことから、紛らわしさを避けて、「平曲」と呼ばれることが多くなりました。本来「平曲」は、江戸時代に平家を稽古事として楽しんだ武士や茶人、俳人たちが気取って読んだ名称です。私自身は話の前後関係から、誤解される心配がないときには、「平家」という伝統的な呼称を用いることにしています。

『平家物語』が13世紀に誕生したことについて異論はないようです。琵琶法師が『平家物語』を語った記事のもっとも古いものは、13世紀末の『普通唱導集』という本に見られます。14世紀には明石覚一という名人が出て活躍したことがさまざまな記録からわかっています。「覚一本」という『平家物語』のバージョンは、この人が、亡くなる前に伝承の崩れることを案じて記録させたものと言われています。覚一以後の約1世紀が最盛期で、その後は古典音楽化して、茶道や連歌の席で語られたり、あるいは仏教の儀式で用いられたりするようになります。

ところで16世紀も半ばを過ぎたころに、三味線が日本に伝来します。平家を語っていた琵琶法師たちは、この新しい楽器に関心を持ちました。使ってみると、琵琶よりずっと軽くて扱いやすいことに気付きました。そこで、この楽器の胴を大型化し、棹も長くして、琵琶を弾くのと同じように撥で弾き、琵琶の代用楽器として使い始めました。『平家物語』を語るのに、三味線で代用した例は、19世紀初頭まで見られます。

江戸時代に入りますと、琵琶法師たちは、この新しい楽器である三味線をもちいて「地歌」という室内歌曲の種目を発達させます。それだけでなく、箏や胡弓の音楽も演奏して、人々の人気を集めます。しかしその中でも、平家の伝承を大切にしましたので、江戸時代を通じて、地歌箏曲の演奏家たちが琵琶も兼習して、平家を伝えてきました。

江戸時代には、引き続き、古典音楽として、鑑賞用や儀式用に平家が演奏され、前田流と波多野流という二つの流派ができます。将軍家の葬儀の折などに平家の演奏入りの法要が行われましたし、平家を得意とし、江戸時代には全国的な盲人組織となった「当道座」の年中行事にも、平家が語られました。それだけではなく、優雅で知的な稽古事として武

士や、俳人等に好まれるようになります。

こうした稽古のために、譜本（楽譜）も作られるようになります。当初は愛好家が、謡本などの記譜法を応用して個人的な覚えとして作られたと思われませんが、やがて当道座側からも関与することになり、安永 5 年（1776）には名古屋の荻野検校のもとで『平家正節』という譜本が完成し、これが今日まで用いられています。現存する譜本のほぼ半数がこの記譜法によるものなので、広く普及したことがわかります。なかで、荻野検校のご子孫にあたる尾崎家所蔵本がもっとも祖本に近いのではないかと考えられています。

明治時代になりますと、徳川幕府もなくなり、当道座が解体され、平家を儀式音楽として奏する場も激減してしまいました。そのなかで、京都では藤村性禅（1853-1911）を最後として全編を語れる琵琶法師はいなくなりました。東京では、明治時代初期には、地歌箏曲家たちによる平家の演奏が時々行われていましたが、明治中頃になるとそれもなくなりました。

名古屋は、伝統を大切に土地柄だったので、明治時代になっても地歌箏曲と平家を兼習するという習慣が当道出身の盲人音楽家たちの組織「国風音楽会」によって引き継がれ、昭和後半には「三検校」と呼ばれた、井野川幸次、土居崎正富、三品正保の 3 人が平家を伝え、1955 年に「記録保存の措置を講ずべき無形文化財」にも指定されました。三品門下に今井勉（1958-）が育ち、今日まで平家が口頭で伝えられてきました。国風音楽会では当道を思わせる儀式がいくつか残されていますが、そうした折には平家が演奏されますし、箏曲演奏会のなかで平家も演奏するという習慣も続けてきました。素人の稽古事の相手や弁才天の奉納演奏といった、古い習慣も、第 2 次世界大戦前後までは続いていました。

一方、江戸時代の津軽藩は、国元の武士たちの教養として平家を導入した歴史があり、その際に導入の任にあたった楠美荘司（1819 生）の子孫にあたる館山漸之進が、明治 30 年代に、東京での平家の衰退を嘆いて、その保存活動に乗り出します。『平家音楽史』を著し、東京音楽学校内の邦楽調査掛で平家の五線譜採譜と蠟管録音を行い、四男甲午に平家を教えました。

館山甲午は、東京音楽学校でバイオリンを学び、高等女学校や女子師範学校などで音楽の教員をしていましたが、金田一春彦先生によって広く世に紹介され、1969 年には、「記録保存の措置を講ずべき無形文化財」の指定も受けます。その後、譜本を用いて、何人かの弟子を育てました。甲午は、『平家正節』の記譜法を習得していたので、それにより、どの曲も復元演奏が可能な状態にありました。しかし、口伝の失われたものも多く、難しい譜の解読には、苦労があったようです。そのため、ときに、同じ個所でも節回しが異なることがあり、弟子たちには混乱がありました。また、中世の語りに復そうと、特殊な発音を取り入れたり、調弦を変えたり、一部の音階を変えたりするなどの工夫を加えました。こうしたことに批判的であった弟子の金田一春彦氏と橋本敏江氏は、より合理的な譜の解読を試み、それに基づいて、それぞれが弟子を育てました。

2. 平家伝承プロジェクト

津軽の平家は、本来が素人の稽古用の伝承であり、当道の伝統から離れて久しいこと、江戸時代以来の語りのコンテキストが失われていること、昭和後半にかなりの変更が加えられたこと、津軽系の演奏者の芸質は素人の域を出ないこと、近年は演奏者を名乗りながら、音程を間違える人すら出てきていることなどから、当道以来の平家の伝統を伝えるのは、名古屋の演奏家のみといってもよいと思います。しかし、現在、名古屋系の唯一の伝承者である今井勉師は、諸々の事情から弟子の育成が困難な状況にあります。

本来、芸能の伝承は、師から弟子への直接の伝授が行われて初めて可能になると考えます。しかし、このままでは確実に当道の平家の音楽伝承が失われてしまいます。日本の文学史から『平家物語』が消えてなくなってしまうたら、大きな損失であることは、誰にでもわかると思いますが、日本の音楽史から、平家が消えてなくなってしまうことも、同じぐらい、あるいはそれ以上に大きな損失です。こうした状況をなんとか打開できないかということで始めたのが平家伝承プロジェクトでした。

(1) 第一次平家伝承プロジェクトー当道音楽保存会の立ち上げと菊央雄司、奥田智之(現雅楽之一)の2氏の名古屋派遣ー

名古屋平家の若手伝承者育成の取り組みを始めたのは2001年のことになります。まずは、活動の基盤となる組織を作る必要があり、当道音楽保存会を立ち上げました。当時のメンバーになっていただいたのは、横道萬里雄、蒲生郷昭、久保田敏子、大貫紀子、茂手木潔子、野川美穂子、Steven Nelson、Alison Tokitaの各氏でした。

この組織の活動として、2001年から2005年ころまで、菊央雄司氏、奥田智之(現、雅楽之一)氏の2名の若手地歌箏曲演奏家を、今井勉師のもとに派遣して、平家の稽古をしてもらいました。その際、文化庁のインターンシップ制度の利用の助言などを行いました。また、ポーラ伝統文化振興財団に申請して、今井勉師が弟子養成のために平家琵琶一面を制作する費用の助成を受けました。

(2) 第二次平家伝承プロジェクトー平家語り研究会Ⅰ(薩摩琵琶の演奏家を対象に)

次に、2011年1月から3月にかけて、若手の薩摩琵琶奏者の塩高和之氏と水島結子氏、日本音楽研究者の星野和幸氏と譲原えりか氏らに、薦田が平家の指導を試みました。この試みは東日本大震災によって中断しましたが、薦田は、この研究会を通して、映像や録音を利用した指導法の経験を積みました。いっぽう、同じ琵琶という楽器を扱いながらも、薩摩琵琶演奏家の持つ近代的な音楽様式、特に声の様式は、必ずしも平家の習得に向いていない、ということもわかりました。

(3) 第二次平家伝承プロジェクトー平家語り研究会Ⅱ(地歌箏曲家を対象に)

そこで、江戸時代以来、地歌箏曲の演奏家が平家も兼習して伝えてきたことを考慮に入れ、地歌箏曲の演奏家を対象に、2015年に平家語り研究会Ⅱを開催して、平家の伝承に取り組んでもらうことにしました。この取り組みに協力してくれたのは菊央雄司氏(地歌演

奏家)、田中奈央一氏(山田流箏曲家)、日吉章吾氏(生田流箏曲家)の3名です。依頼をする際に、声のできている演奏家という条件を考慮に入れました。菊央氏は、すでに名古屋の今井師のもとに数年通い、3、4曲の平家の稽古の経験がありましたので、この研究会で指導にもあたってもらえることが見込まれました。田中氏は、語り風のレパートリーを多く持つ山田流箏曲の演奏家で、その経験が本来語り物である平家の演奏に力を発揮してくれることが期待されました。日吉さんは、プロジェクトが始まる直前に利根英法記念コンクールで優勝しており、その際の演奏を聴いて、その優れた音楽性に期待をしました。

メンバーの次に確保しなければならなかったのは楽器でした。しかし、幸運なことに、名古屋の楽器店経営者、故吉田春三氏の未亡人富貴子さんが、ご所蔵の琵琶を提供して下さいました。

第2次平家語り研究会の立ち上げに際しては、当道音楽保存会を再編成しました。現在のメンバーは大貫紀子、小島典子、黒川真理恵、時田アリソン、徳丸吉彦、福田千絵、の6氏です。また、2016年度から、文化庁の「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」の委託事業に採択され、今日に至っています。

(4) 平家語り研究会Ⅱの目標と伝承の方法

実際にこの研究会を始めるにあたって、二つの目標を掲げました。

- ①現在名古屋に伝承されている8曲の習得によって、その音楽様式を身につけること
- ②平家の楽譜である『平家正節』の読譜能力を身につけること

稽古にあたっては、第一次口頭性の利用が叶わないので、第二次口頭性を利用することにしました。利用した録音録画資料は以下の2点です。

- CD 今井勉監修、薦田治子解説 2009『琵琶法師の世界 平家物語』コジマ録音
- DVD 遠山一郎 2009『「平家正節」盲人伝承八句：ライブ映像と検索：「戦にかかわる文字文化と文物の総合的研究(科学研究費補助金(基盤研究(S))研究成果報告書)」 愛知県立大学文学部

菊央氏と薦田は、一フレーズを師が語ったら、それを弟子が真似するという形で、今井師から指導を受けましたので、その形を踏襲することにしました。

また、3人の演奏家は、晴眼者なので、口頭性だけでなく、書記性も利用することにしました。楽譜には、江戸時代に作られた伝承譜と、名古屋の戦後の3検校の語りを採譜した五線譜があります。

伝承譜『平家正節』(平家正節刊行会編、渥美かをる解説 1974、大学堂書店)

五線譜『採譜本平曲』(藤井制心、1966、名古屋市教育委員会)

伝承譜には様々なものがありますが、現行の名古屋の平家がよりどころとしている『平家正節』の祖本と考えられる尾崎家本を用いることにしました。これは、影印で出版されています。

五線譜を使うかどうかは、当初迷いもありましたが、3人とも五線譜がほぼ読めたので、まずは五線譜と録音を併用することにしました。五線譜は、平家の音楽の特徴である無拍でメリスマの多いリズムや、連続的な音高変化を書き表すことが苦手なシステムですが、演奏を聴いてから、あるいは聴きながら見ることによって、一つ一つの音符の音価にとらわれることなく、いくつかの音符の塊を平家の節回しと対応させて把握するようになっていきました。伝承譜より五線譜の方が、余白に声の扱いや、細かな装飾音の上がり下がりも追記することができますので、稽古の最初は五線譜を用いると効率的に平家の音楽様式を身につけることができるように思います。

伝承譜は最初から3人に渡してあり、回を追うごとに、伝承譜の説明を多くし、次第に伝承譜に馴染んでもらうようにしました。ほぼ2年間を経て、3人は、名古屋に伝承される8曲の稽古を一通り終えました。それ以降は、基本的には伝承譜を中心に稽古をするようにしています。伝承譜の読み方については、拙著で現行伝承と『平家正節』の対応を分析したものががあるので、それを参考にしています（『平家の音楽—当道の伝統』2003 第一書房）。

このようなやり方で、研究会は目下4年目に入っています。その間に、3人は、名古屋の伝承曲8曲の稽古を通して、ほぼその音楽様式を身に付けたと言える状態になりました。さらに、現在は、演奏伝承の残らない曲でも演奏ができるように、伝承譜の解読法を身に付けようと、研鑽を積んでいるところです。

（5）成果の発表

研究会の成果を発表することも、伝承にとっては重要な活動と考えています。そこで、研究会Ⅱの発足4か月後から、様々な演奏機会をとらえて、成果を発表してきました。

- 2015年6月13日 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催公開講座
- 2015年12月18日 東京芸術大学邦楽科特別講義
- 2016年7月20日 浜松市楽器博物館レクチャーコンサート
- 2016年10月23日 ICTM 国際コロキウム（上海音楽院）
- 2016年12月16日 清栄会「初心者のための三味線音楽鑑賞会」
- 2017年1月22日 日本三曲協会講演会
- 2017年4月4日 自主企画によるデビュー演奏会
- 2017年7月30日 鎌倉国宝館
- 2017年8月16日 教育芸術社『高校生の音楽1 指導用・鑑賞用CD』のために録音
- 2017年11月25日 文京シビックホール主催公演『日本の響き世界の響き』
- 2018年1月15日 東京文化財研究所記録保存
- 2018年1月16日 東京芸術大学邦楽科特別講義
- 2018年3月29日 コルシカ島ピニャにて Oulomenen Project のコンサート

2018年3月31日 ジュネーヴにて Oulomenen Project のコンサート

なお、本プロジェクトのためには、ポーラ伝統文化財団、新日鉄住金文化財団、文科省科学研究費などの助成も受けています。

この他にも少しずつ演奏依頼が入るようになってきていますが、まだ気は緩められないので、自主的な演奏会も企画しています。

3. 今後の課題と目標

研究プロジェクトを進める中で、浮かび上がってきたのは、楽譜類の整備が必要だということでした。

理想を言えば、口頭伝承を受けながら、伝承譜を使って演奏技術を身に付けるのが望ましいことですが、伝承譜は今から250年近く前にできたものなので、現行の語りと多少ずれが生じています。したがって、伝承譜を現行伝承にあわせて改訂する必要があります。

一方で、細かい装飾音や、同じ墨譜に複数の読み方がある場合など、五線譜を補助的に使うことも有効です。しかし、既存の五線譜（藤井1966）は、今井検校の一つ前の世代の3検校によるもので、しかも、3人の語りには相互に多少の異同があったものを、採譜のために一本化したという経緯があります。したがって、五線譜も、今井師の語りに合わせて改訂する必要があります。

今後は、演奏機会の確保と、恒常的な稽古の機会の設営と、こうした書記的な伝承手段の改訂が、課題となります。皆様の、ご支援を賜れば、ありがたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

ご清聴ありがとうございました。